研究ノート

「オシャラク」狂犬病説に対する疑義

松木明知

日本医史学雑誌第三十巻三号
昭和五十九年七月三十日発行
昭和五十九年一月十七日受付

1、はじめに

ＮＨＫ山形放送局から昭和五十六年九月三日「オシャラク病」と題するテレビ番組が放送された。内容は享保七年（一七二二）山形県庄内地方の酒田で猖獗を極め、従来全く病名が不詳とされていた疫病「オシャラク」を狂犬病ではないかと紹介したものであった。

もちろん東北地方の疫病流行史について研究している著者も、テレビの中で二分程オシャラクは狂犬病とは考えられず、他の流行性伝染病であろうと述べた。

その後、このテレビ放送を観た同地方の郷土史家や一般の方々と話す機会を持ち、この方々がいずれもオシャラクが狂犬病であったような印象を受けていることが判明した。

単なる一地方の、しかも過去に流行した一疫の診断が何であっても、数千年の医学の歴史から考えれば、取るに足らない極めて些細なことかも知れない。

しかしこのような何ら信憑すべき根拠を持たない説が、マスコミによって取り上げられ、所謂郷土史家と称される人たちまでも信ずるようになれば、これがあたかも定説のように取り扱われてしまう危険性がないわけではない。しかも年を経るに従って、それが真実であるかのように誤って信じられるようになり、もし刊行物の中で言及されるようになれば、

改めてそれを反証するために要するエネルギーは計り知れないものがあろうし、場合によってはそれが不可能となる場合すらあろう。

このような意味において著者は、「オシャラク」狂犬病説の根拠は極めて薄弱なものであり、診断は未だ不詳とすべきことを提唱したい。

2、「オシャラク」の出典

山形県庄内地方の酒田で、享保七年（一七二二）「オシャラク」と呼称された疫病が流行し、多数の人々が病死したという。これは同地方の歴史を伝える「夢宅年代記」[1]の同年の条に左のように記されていることで知られる。

享保七年壬寅年春中より疫病はやり酒田在郷にて死人数不知名付て「おしゃらく」病といへり酒田にて死人三千人に及べり

この文献は同地方の歴史を知るためには必須とされるもので、信頼性の高い史料である。

したがって三千人という病死者については、一考を要するとは言うものの「オシャラク」と称する疫病が酒田地方に蔓延して、相当の死者を数えたことだけは確実であろう。因みに「オシャラク」とは遊女を意味する同地方の方言である。

3、オシャラク狂犬病説の提唱

昭和五十六年五月五日付の「山形新聞」[2]は、当時北里大学獣医学部の四年生（現同大学院学生）であった山口敏郎氏の研究を伝え、寛保二年（一七四二）に同地方に狂犬病が発生したことを示す左の史料があることを根拠として、それよりも二十年も前に発生したオシャラクを狂犬病であったとしたのであった。これは山口氏[3]らによってリポートにまとめられ報告された。

寛保二壬戌年夏中より犬人をかむ其疵平癒して三十日四十日と云へば又候再発して死す酒田にて死人数を知らず[4]

真偽は別として、この研究が一般の人々に与えた影響は少なくなく、狂犬病である点が世間の耳目を集め、前述したように四ヶ月後の五十六年九月三日にＮＨＫによって取り上げられ、これによって全く知識のなかった郷土史家もオシャラク狂犬病説を是とする風潮が生れるに至ったのである。

4、オシャラク狂犬病説の誤謬

前述したオシャラクの流行を示す史料を詳細に読んでもこれを狂犬病と診断できる根拠は何もない。

第一に寛保二年（一七四二）に酒田地方に狂犬病が流行したことを論拠に、それよりも二十年も前の享保七年（一七二二）のオシャラクを狂犬病と推定することは、全く誤りである。

寛保二年（一七四二）にはすでに酒田地方に狂犬病が浸透していたことを示すだけである。それよりも二十年前の疫病とは何の関係もない。

第二にオシャラクに言及した記事中、病因、病状として狂犬病に特有なものが何ら記されていない。

第三に山口氏らは、野呂元丈が元文元年（一七三六）に著わした「狂犬咬傷治方」の中の「それ狂犬の人を咬ふ吾邦古来未だこれをきかず近年異邦よりこの病わたりて西国にはじまり、中国上方へ移り、近ごろ東国にもあり」の文を解釈して、「近ごろ東国にもあり」を酒田における享保七年（一七二二）の「オシャラク」を意味するものと解釈した。

この解釈も誤りであり、東国は何も酒田だけに限らず、この文のみからは、享保七年という年代と関連づけることも不可能である。

第四にオシャラクという呼称を考慮していないことである。もし享保七年の疫病が狂犬病とするならば、少なくとも、病犬、狂犬など犬に関連した語句が記されるのが通例である。

津軽地方での流行の記録を見ても「享保九年弘前ニ而人喰犬か出来り四山之犬喰殺（築木館留帳）」、「享保二十年当年諸国共犬ノ病はやり斃死犬多有之候（平山日記）」、「元文六年正月より犬に病付候而、有増犬絶候程ニ死ニ候。方々に而犬ニ喰われ死候人に有。其外馬並狐狼等も病と見え多く所々ニ而死（永録日記）」、「宝暦六年二月御運送方野里村只六病死（病犬に喰われ病死之よし）（平山日記）」、「文久二年六月より犬病流行し而青森黒石抔而犬数十疋斃候よし（広船日記）」というように、少なくとも津軽において狂犬病の記事には必ず「病犬」とか「犬」の語が見出されるのである。他の地方でも同様ではないかと思う。前述したように酒田地方の寛保二年の流行について「夏中より犬人をかむ」と「犬」が披見されるのはその好例である。[5]

日本の疫史を通覧しても、痘瘡、麻疹など素人でも一見して病名が判断可能な流行性伝染病に対しては、俗称で称呼されることはない。俗称で呼ばれる大半はいわゆる流行性感冒で、富士川游の「日本疾病史」[6]にも、明和六年（一七六九）の稲葉風、天明四年（一七八四）の谷風、寛政七年（一七九五）の御猪狩風、享和二年（一八〇二）の薩摩風、文化五年（一八〇八）のネンコロ風、文政四年（一八二一）のダンホウ風、文政十年（一八二七）の津軽風、天保三年（一八三二）の琉球風、安政元年（一八五四）のアメリカ風などが挙げられている。

このような事例は津軽でも同様であり、例えば、延享四年（一七四七）には猿風、明和二年（一七六五）六月には、ナンバクロロ風、明和七年（一七七〇）の咳気はミカン風が知られている。

もちろん、流感であっても、俗称で呼ばれないものもあることはもちろんである。

このように考えると、俗称といえども、それは病因や流行状況や当時の社会的出来事などと何らかの関連を有することがある。しかし私は、オシャラクの呼称の中に狂犬病を暗示する痕跡すら見出すことは出来ない。

第五に山口氏は、「享保七年寅年春中より疫病はやり……」の「春中から」という語句は、犬の発情期の春に一致しているから、オシャラクが狂犬病であった有力な証拠であるとしている。春から疫病が流行してもこれは何ら狂犬病が流行

したことにはならず、津軽での例を示すと、元文六年の犬の狂犬病は正月から流行し始め、文久二年には六月から犬の間に狂犬病が見られた。したがって犬の発情期に一致するからとて、春に流行した疫病を狂犬病と診断することは当を得ていない。

第六に、三千人という病死者の数である。狂犬病は狂犬病に罹患した獣の咬傷によって伝染し、原則的には人から人への伝染はしない。三千人という病死者の数を直ちに信用出来ず、多くても数百人の病死者であったとしても、数百人の人間が狂犬病に罹った犬や狼などに咬傷を受けて狂犬病になり遂に死亡するとは考えられず、もしそうであったとすれば、文献の中に必ずや「病犬、病狼に嚙まれて」の記載があって当然である。

非常に多数の死者を数えたことからすれば、オシャラクは人から人へ伝染した疾患として誤りあるまい。

以上述べた六つの理由によって、享保七年（一七二二）酒田地方で猖獗を極めたオシャラクが狂犬病であったとする説は誤りであることが了解されよう。白井恒三郎[7]もその著において、「夢宅年代記」を参照して酒田における寛保二年の狂犬病流行を指摘したが、享保七年のオシャラクについては何ら言及していない。

5、オシャラクの本態

前述したように享保七年（一七二二）に三千人もの死者を算したという。三千人の死者は少し誇張があるにせよ、少なくとも相当死亡率が高い疫病であったことが推定可能である。

現在伝染病[8]として、コレラ、細菌性赤痢、腸チフス、パラチフス痘瘡（天然痘）、発疹チフス、しょう紅熱、ジフテリア、流行性脳脊髄膜炎、ペスト、日本脳炎、マラリア、麻疹、百日咳、インフルエンザ、黄熱、破傷風、狂犬病、炭疽、伝染性下痢症、つつが虫病、フィラリア病、回帰熱、住血吸虫病、トラホーム、らい、結核、梅毒、淋病、軟性下疳、そけいりんぱ内腫症が知られている。

遊女を意味するオシャラクから梅毒などの性病が示唆されるが、これらの性病によって短期間に少なくとも数百人の死者が出ることは、考えられない。

前述したように痘瘡、麻疹など発疹があって素人にも一見して見分けられる疾病は、俗称で呼称されることはなく、したがって否定される。破傷風以下の伝染病は、死亡率、伝染形式のことから全く一考に価しない。黄熱も当時日本に持ち込まれた形跡はない。コレラも従来の研究では文政五年が本邦における最初の流行とされ、単に一地方においてのみ流行することは考えられない。マラリア、百日咳も死亡者数から否定されよう。

残りの伝染病の中から早春に流行し始め、しかも大流行を来しやすく、さらに多数の死亡者を出す可能性の最も高い疾患を選択すると、インフルエンザ以外にはない。

(9) 当時酒田は日本海海運が盛況を極めており、多勢の他国の人間が頻繁に出入りしていた。そのような人が花街にインフルエンザを持ち込み、まずオシャラクが感染し、それからインフルエンザが酒田の町に蔓延し始めたことが最も考えられる。そうすれば当然「オシャラク」と俗称が生れてもよいことになる。

もしインフルエンザとすればどうして風病、風邪という語が用いられなかったかという疑問が起こるが、その症状によって異なった呼称が用いられたのである。例えば富士川游の「日本疾病史」に引用する享保元年（一七一六）三月のインフルエンザはわずか一ヶ月で江戸で八万人の死者を算したが、単に「熱を煩う病人多く」と記され、何ら「風邪」「風病」「咳気」の語は用いられていない。したがってこの例からも理解されるように、インフルエンザが必ずしも「風邪」などと記載されているとは限らないのである。しかし著者は何も「オシャラクインフルエンザ説」に固執するものではない。

6、オシャラクがどこから伝播したか

オシャラクの正確な診断はさておき、どこから伝播されたかという疑問が残る。この疑問に答えるには、現在の段階で

は困難である。その理由の一つとして酒田を中心とするとくに西の地域の享保年代の詳細な疫史が完成していないためである。津軽地方については著者の比較的詳細な疫病史が完成しているが、当時の諸般の状況から疫病は東漸北上して伝播していったものと考慮されるからである。したがってこの問題の解決のためには、各地方の詳細な疫史の完成が必須である。

7、おわりに

享保七年（一七二二）庄内地方の酒田で大流行を来し、死者三千人を数えたという謎の疫病「オシャラク」は一部に言われているような狂犬病とは考えられず、年代、死者数、名称などから考慮すれば、インフルエンザの可能性が高いことを述べた。

インフルエンザとする確定診断のためには、近隣諸地方の詳細な疫史の完成が強く望まれる。

なお本稿を草するに際して、山形県立工業高校の岩田明氏および北里大学獣医学部（大学院）山口敏郎氏より貴重な資料を戴いた。ここに記して感謝の意を表する。

文　献

(1) 斎藤美澄編　十全堂誌　三頁　明治四十四年所収
(2) 山形新聞　三四五二六号　昭和五十六年五月五日
(3) 山口敏郎、伊藤洋一　狂犬病についてのレポート　北里大学獣医学部クラブ活動　レポート十三頁
(4) 文献1所収
(5) 松木明知　明治前津軽疫癘史　松木明、松木明知著　続津軽の医史　津軽書房　昭和五十年　六十四頁
(6) 富士川游　日本疾病史　日本医書出版　昭和十九年
(7) 白井恒三郎　日本獣医学史（復刻版）　文永堂　昭和五十四年　一九〇頁

(8) 呉建、坂本恒雄著　冲中重雄改訂　内科書（中）南山堂　昭和三十七年　三頁
(9) 誉田慶恩、横山昭男　山形県の歴史　県史シリーズ6　山川出版社　昭和四十五年　一三六頁

追記　本稿を記した後に岩田明氏から「菖蒲氏年代記」（余目町史資料第一号所収）の教示を受けた。それには「享保七年五月より酒田にてやく病はやり四千人余死郷中にてもはやる」とある。筆者の推定通り、「やく病」つまり「疫病」とのみあって、「狂犬病」を示唆するものではない。

On an Epidemic "Osharaku" that occured at Sakata in 1722

by
Akitomo MATSUKI

In the spring of 1722, an epidemic call "Osharaku" prevailed widely among the people of Sakata, Yamagata prefecture and over three thousand people died due to the epidemic. In 1981, a TV programme was made and broadcast, in which "Osharaku" was diagnosed as hydrophobia. Osharaku is a word from a dialect of the Sakata district meaning prostitutes.

This was proposed by Mr. Yamaguchi, however, his opinion was based upon an incorrect hypothesis that the epidemic must have been hydrophobia as another epidemic prevailing in the same district of Sakata in 1742 was discribed as hydrophobia.

There is no definite proof that the epidemic was hydrophobia. Another conclusion would be that this epidemic might have been malignant influenza considering the various points sofar.